

海から来るもの

イチ

その雛は巢から落ちたのだろうか、ぜんまい仕掛けのように震えている。黄味がかった肉色の嫌らしい皮膚を引き攣らせ、青草を嫌い、喉を枯らして叫んでいる。小さな襦袢状の手羽を胸筋で突つ張り、あらん限りに伸ばした首をぐりぐりと振り回す。この雛が望んでいるのは、どうにかして母鳥をその耳障りな音で呼び戻し、地上四メートルの位置にある小さな巢に戻ることのみで、そうで無ければ死ぬ他無い運命を直進している……体力を消費し全てを賭けたその行為が、助けを呼ぶ無力な叫びなのだった。今や雛の生命はその小さな身体の内を抜け、気まぐれな偶然の風に散らされようとしている。

王妃はそれを聞いていた。この雛が力尽きて静かになるまで見届けようと思っただが、もう一〇分ほど経過している。まったく、脆く小さく未熟でも、生命は案外しぶといものである。

時間は相対的な形で感覚の領域に現れる。ほんの少し足を止めた見物のつもりであったから、この僅かな時間でさえ定例典儀と同じくらいの質量、憂鬱と焦燥が積み重なっていた。とつくにうんざりしていたのだが、諦めて目を離れた瞬間にその時が来るのでは無いかと、そんな

な気持ちに捕縛されていた。それと言うのも、この広大で美しい庭園を散歩する榮譽に与れるようになるまでには、幾度もの幸運に助けられてきたが、こと見逃す、ような不運に見舞われることも又多かった。子供の時分から、緑蛹の背が割れる瞬間も柱の影から戯けたザジが飛び出した瞬間も、兄が落馬して首の骨を折った瞬間も見逃してきた。中々結実しない期待に倦んでふと内省に立ち戻った途端に、意地の悪い世界がちらりとその姿を見せる。待ち望んだことであれ突発のことであれ、出来事は常にいつの間にか完了していて、意思を介在させる余地は残されていない、それが人生だった。

余力計り知れない雛から漸く眼を引き離し、足早に廻覧道に行く。その終わりを見ることは諦めて忘れようと思っただ。もう直ぐに雛の生は途絶え、そして猫に啜えられて認識外の混沌とした世界の混ざりものの一部となるだろう。曖昧な「何処か」で産まれ何十年かの後に死ぬ大勢の人間のように、馬車の窓から見えるだけの、訪れた街の活気を構成するだけの生活の匂いのしない群衆のように、個の生は視認できる時空にしか存在し得ない。

疎らな樹木の下が生垣が両脇に拡がり、泉を中心とした円形広場に出た。冷水を湛えた人工泉は細波も立てずに循環し、そこはすっかり微睡みの午後、冬めく空は既に金色の光を地上一面に振り撒いている。噴水の細かな

飛沫やイヌヤツゲの葉が静かな風に踊って、光の粒が立ち上った。ゆつたりとした心地良い憂鬱が、顔を温かく湿らす霧と同じく纏わりつき、まるで呼吸器を外された末期患者のような気分だ。

宮殿の中庭を王妃は歩いてきた。ここ数日は寢床でもまんじりとせず、度重なる重圧に神経は擦り切れていた。彼女はただならぬ体を引きずって取り留めもなく思考を巡らせながら、日課の散歩に出ているのだ。王妃が独りになれる時間などなく、こうしてたった一人で歩いているようでも、後ろにそびえる宮殿の無数の窓から使用人たちが監視しているに違いない。単に表面的なものでしかないと十分に理解しながら、それでも許可された範囲での庭園散策は彼女の心を癒した。

青筋立つてばんばんに膨れ上がった彼女の心には不安がみっちり詰り込まれ、気分転換のためにこうしてその不安を緑陽の孤独と平穏に溶かし込もうとしても、心の空虚を埋める新しい不安が絶えず産まれる。彼女の胎内の不安の種は、質は変わっても量は変わらずにばかりと時たま主張する。気を落ち着けて不安を吐き出し、酸欠で気が遠くなりながらも新しい誕生の前にペシミズムを心に詰め込む他には、身を犯す不安を追いつ出す手段は無い。彼女が独り庭を歩きながらすることといった

ら、そのように自身を制御下に置くことを諦め、捨て鉢な気分が強いて浸ろうとすることだった。

王妃は果樹園の湿った影に進んだ。すうと空気が、世界が変わる。分かつている、これはただの仮初めだ。

壮麗で大観な豪庭も、果樹園に入った途端に薄暗く貧民街染みたる卑屈が充満していた。三代前の母后陛下が彼女の故郷をそこから移植してきた姫林檎でもって再現し、絵から抜け出たような可愛らしい田園風景が宮廷人の目を楽しませたそうだが、今では見る影もない。貴人の中にここへ立ち入る者は無く、それゆえまともな手入れも入らず、使用人が時折その喉の渇きを癒すために実をもぎに来るのみであった。小ぶりの林檎たちは既に収穫されていたが、地面に落ちたいくつかは芳香を放っている。臍氣に判別できる獣道を辿りつつ、彼女の鈍った思考は再び自らの過去を弄び始めた。

黒羊角の勇猛な覇者、そきら大連国の領地は見知らぬ土地に興入れてきた少女を、複雑に折り重なった数多の急峻たる岩林と爽やかな甘みを匂わす深い霧でもって出迎えた。知り合いもいなければ、言語も文化も全く異なる異国の地への不安に塞いでいた彼女も、その美しさには涙を引つ込め、息を詰めてただひたすらに見つめたものだった。

いざ宮廷に入ってみると、連王陛下の姉夫婦は花嫁の祖国から帰郷したばかりで、拙いながらも何とか彼らとは言葉を交わすことができた。何よりも心強かったのは、そきら大連国及び南レイグン諸領第7代君主ゼイエルツ3世陛下が花嫁を気に入ったことであつた。国庫と領地の安定、長年小競り合いを繰り返してきた南方河住民族へのけん制の要求から、神に祝福された由緒正しい彼女の青い血統のために、伝令によつて婚約が取り付けられたのである。いざ式に臨んで彼女の顔を一目見た瞬間に、陛下がその醜さに閉口し難色を示したら——ともかく、そのような王妃の不安とは裏腹に、婚礼の主催且つ主賓はその異国の華奢な少女に満足したらしい。こうして、彼女は無事夫となつた連王陛下の後援を得て、そきらの壮麗な宮殿に居場所を見たのだった。

広大な領地のうちでは数度の飢饉や村落の収奪、宰相暗殺計画の露呈などがあつたようだが、宮廷ではそれらは全て陛下のご機嫌を図る判断材料以上のものを意味することはなかつた。彼女はすぐに言語を覚えて従者の扱ひ方を学び、社交界の手練手管に慣れた。若い王妃である彼女に近づく者は多かつたが、いまだ少女らしい王妃が好んだのは南大広間の清掃を任されている数個年上の侍女だつた。燃えるような赤髪の勇敢なザジは、下賤な我が身を弁えつつも、麻痺してしまつた少女の胸中を憐れんで、その聖脈の王妃に様々な話を語つて聞かせた。

二人の少女の間に生じた信頼と尊敬の念は日ごとに深いものとなつていったが、ある時王妃がいつもの南大広間へ足を運ぶと、そこに箒を握つていたのは、姉のように慕つたあの赤髪とは似ても似つかない腰の曲がつた老婆であつた。王妃の入れ込みようが女中頭の目に余り、王の機嫌を損ねる結末を恐れて侍女の担当を外したらしいという噂を、彼女は突然の離別から三年の後に知つた。

たいして広くもない果樹園の縁までたどり着き、自然に見せかけた人口の小川がさらさらと流れる土手に出る。日は高く昇り、陽光は熱いほどだ。ふと、川沿いの木の影にみすばらしいゆりかごが残されているのに気が付いた。中に子供はいるのだろうか。数回離れたこの場所からはわからない。王妃は脂ぎつた緑葉を茂らす木の下へ歩いて行つた。この胸が痛いほどに高鳴るのは、期待のためか不安のためか、それとも。

果たして、その籐籠の中にはふくふくと太つた赤ん坊がいた。泣きもせず無垢な瞳で王妃をじつと見つめている。彼女がもつとよく見ようと近づいた時、その木の陰に眠りこけている乳母がいるのに気が付いた。王妃は悪事がばれた時のように心臓がはねて、咄嗟に赤子を掬い上げて胸に抱き、姫林檎の果樹林へ逃げ込んでしまつた。衝動的な、不可解な行動であつた。

新天地での生活もはや二桁の年月が経ち、経験を積んだ王妃は相変わらず世界情勢とは全く隔絶した宮廷の中で忙しく立ち回っていた。宮廷の人の出入りは激しいが、全体では変化することもなく恒常性を保っている。

王妃は既に計八人の子供を胚胎していた。しかしそのうち二人は目の目を見ることもなく白いシートにくるまれてどこぞへと去ってしまい、三人は四つになる前に病や事故で亡くなった。そして残った三人は——ああ、私の愛する清廉な乙女たち！今やもう王の寵愛は底を尽き、未だ側女はとつていないものの、それも時間の問題だ。王妃個人の立場が危ういということの他にも、南との会戦が長引いていることが大きな問題となる。ゼイエルツ三世は堅牢な宮殿での終わりの無い書類仕事を一旦中断し、そして二つの内海を超えた先の遙かな戦線に立つ心算でいるのだ。兵士を鼓舞し戦費を調達するために大々的な遠征を計画しておきながら実行に移せないのは、ただ彼に嗣子がいないからだ。

万が一レイグン家の当主でもあるゼイエルツ三世がその座から降りるようなことがあれば、彼の後統は四人の腹違いの弟達によって分割され、後継者争いがおこることは想像に難くない。其々が外国勢力や国内の異端と共謀して相争い、先代ゼイエルツ二世の成し遂げた統

一国家としてのそきら大連国は容易に瓦解するだろう。八〇年前の王朝鼎立期には惨憺たる絶滅戦争が大陸に溢れかえり、有名な宇克劫略では戦地に発った男は皆拷問の末に爛れ死に、女は皆祈りの場で辱められ、幼児は皆首を捻られ道端に捨てられた。レイグンの血脈を繋いで聖絶の自殺を避けるためには、是非とも可及的速やかなる男児が望まれたのである。そきら大連国の王妃は存在意義そのものといっても過言ではない自らの聖血の提供と正当な王位継承への助力という使命を未だ果たせていなかった。

一昨年の出産には王は顔も見せず、また伝言も残さなかった。産まれたのが女と知ったのだろう、公の場でさえ妻を遠ざけている。寝台の上で彼がまだ見ぬ王太子の名はジョージと心に決めていると幸福そうに話してくれたのは、いつのことであったか。

遠く記憶の靄の向こうに消えかかった少女時代、蠟燭の灯に照らされた父の深い皺を思い浮かべた。彼の妻は愛娘の誕生と引き換えに命を落とした。亡き妻へ惜しみなく注いできた深い愛情は行き場を失い彼の身体を侵して黒く染み込み、とうとう新しく妻を娶ることはなかった。一人娘は国家の再興をもたらすほどの美貌は持ち合わせていなかったが、父は妻への愛情を——屈折し腐り落ちた寄せ集め——不器量の娘に注ぎ、彼女は淑女たる作法とあらゆる教養を死に物狂いで吸収した。

北東の大国であるそちら大連国と西部の鷹揚な商人たちの住まう河川地域の対立は年々激化し、両勢力に挟まれたかつての威光に縋る貧しい小国家は、卓越したバランス能力によつて複雑で微妙な外交危機を乗り越えなくてはならなかった。しかし、悲嘆に暮れる国王にその意欲はなく、大陸で最も長い歴史を持ち、神がその手で創り給うた唯一絶対の聖国家は、呆気なく新興の鉄血帝国の傘下に下った。その同盟の証を立てるために、神に由来する青い聖血の盃としてそちらに捧げられたのが、かつての彼女なのであった。

口さがない宮廷から身を隠し、太陽神の慈愛の眼差しをかわしつつ、王妃は薄暗い林檎園に独り下賤の赤ん坊を抱いている。身包みを剥ぐと、その赤子は男児だった。指をくわえて眠りに落ちている。彼女はしばしその安寧たる姿にやがて生まれる子供の理想を重ねて、静かに視線を注いでいた。胎内に寄生した不安はいつの間にか消え失せ、代わりにもつとあたたかいもの——厭世や捨て鉢ではない——が滾々と湧き出て心を満たすのを感じた。爽やかな霧深い鬱蒼とした森の奥、樹冠の隙間から甘く澄んだ泉の鏡面まで、黄金の光が刺し貫く。朽ち葉が足裏を柔らかく受け止め、死骸の絨毯は透明な水面の縁を乱して世界を暖色に染め上げるも、その中に過去の残滓、未来の魁、新芽の緑が白紙に一つ打たれた黒点

のように風に揺られて感じられる。ザジ、燃え盛る貴女の心は今まさに、蛹を割ってこの世に顕現しようとしている。

我らが大陸の創世、人間の国を神から賜った伝説の英雄、始祖の尊額王は、伝説では永久歯が全て生え揃った成長した肉体で産まれたといわれている。古代北方世界を統一した某国では、王座にかかわる出産は、全て神聖な森の中で母独りの力によつて行われるのが慣例だった。そして、王妃の母親の出産は彼女の肉体そのものために酷く出血を起こし、手の施しようもないほど惨惨たるものだったらしい。

恐らくは女官たちによる不貞の証なのだろう腕の中の赤子は、まるで幸福の象徴のようにもつれた睫毛をふるわしている。

王妃の人生は幸福であった。彼女の婚約が決まると、あれほど恐ろしく厳格で絶対的であった父が途端にまごつき娘の扱いに困っているのが分かったし、陛下から紫紺の冠を賜ったあの時、見渡すほどの群衆にかしずかれた時の、足元から背中に取り顎を震わす気怠い高揚感は一瞬忘れることがないだろう。そして高らかなトランペットの音で鳩が飛び立ち、驚いた彼女への陛下の一瞥、あれはお優しい真心からのものだった。あの瞬間から、

大陸の全なる頭蓋を抑え付けて自分こそが一際強く聖光を背負っているのだという自尊心を信じて疑うことは一度も無かった。およそ此岸に起こり得る幸福は全て享受し、彼岸の如き恐ろしい辛苦は彼女の目にはちらとも映らなかった、はずだ。

それが今は？

もういやだった。朝目を覚まして掛け物を剥ぐときの吐きそうなほどの祈り、王妃の腹は日に日に近づく破壊を可視させる時限爆弾だった。胸に迫り上がる身を滅ぼす様な不安は肺を圧迫し、今も血管を遡る触手のような悪い想像が脳髓に達してのたうち回っている。彼女の腹にはどぶねずみの屍に産みつけられたニクバエの卵のように、世界を変え得る至極の偉尊が眠るのだ。そして、困憊した彼女が眠りに落ちて意識を手放した瞬間、それは目を覚ます。私の子、ジョージ、この胎内のこのもの程、重たい生命は後にも先にもこれっきりだろう、そう思った。

今、愛する子供への慈しみを、郷里の老父への憐れみを、尊敬する夫且つ絶対的な主への忠誠を、莫大な臣民の些末な生活への責任を、神と交わした不可侵無謬の契約への尊崇を、世界の真理と計り知れない未来への信頼を。

そして、自らの信仰と理念と、手放してきたものへの覚悟を。

すべて、その胎に懸けていた。

スカートをたくし上げて秘部に手を触れる。無二の至上善、いずれ王となる宝、陛下と国家に捧げる跡継ぎ。ぐいと手を押し込み、その何かを探る。

影が縮んで陽が照り、肩から背中にかけてが日光に熱くひりつく。涙で溶けたまぶたと喉が痛い。地についた膝に小石が食い込んでいる……落枝を手に取った。拳は既に血に染まっている。

夏の白雲、私のジョージ。

真白な肉は、黒ずんだ血に塗れた。彼は目を覚まし、火がついたように泣き出す。それでも王妃は、構うことなく、自らの血と肉片を、赤子に塗りつけた。これは産声に、聞こえるだろうか。これは胎盤に、見えるだろうか。外部の目から、完璧に隠しおさせるには、この果樹園は、やはり小さすぎる。異変に気付いた侍女たちが、ここへ駆け付けるのも、恐らくは時間の問題であろう。凍りつく身体の内が、真昼の陽気に溶けてゆく。壮絶な痛みが、近づいてくるのを感じる。この痛みが、耐えられないほどに激しく、炸裂する時がいつに来るのか、恐怖している。その混乱から逃げ出すように、まぶたが重く、頭に霞みがかかる。

それでも、気を失ってはいけない。
気を失ってはいけない。気を失ってはいけない。
気を失ってはいけない。気を失ってはいけない。
気を失ってはいけない。気を失ってはいけない。
気を失ってはいけない。気を失ってはいけない。

ジョージの、丸々とした綺麗な身体。王妃の、疲労に萎えた血濡れの両腕。隠さなければならぬ、知られてはいけない。
小さな肉の塊を茂みに押し込んだ。